

聖書:ルカの福音書9章28~36節

説教:光り輝くイエス

はじめに

今年最後の礼拝を迎えております。年末の慌ただしい中におりますが、ひととき、主のみことばの前に静まりたいと願います。

あるときイエスが弟子たちに、「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」と質問したとき、ペテロは即座に手を挙げて「神のキリストです」と答えました。まったく正しい答えをしたはずなのに、イエスはなぜか「このことをだれにも話さないように」と命じてから、ご自分が多くの苦しみを受けて殺され、三日目によみがえらなければならないということ、初めて弟子たちに明かされます。これを聞いた弟子たちが、どこまで理解したのか。答えを最初に言ってしまうと、実はまったく理解していなかった。いや、耳を塞いで理解しようとしなかったと言った方が正しいかも知れません。そんな様子であることをもちろんイエスはおわかりです。ならば普通はどうするか。これはこのような意味ですと、弟子たちが納得するまでかみ砕いて説明するでしょう。ところがイエスは、弟子たちの心の頑なさをそのままにして、ペテロとヨハネとヤコブの三人を連れて山に登られ、そこで不思議な体験をさせるのです。この三人は山の上で何を目撃したのか。そこにはどんな意味があったのか。ともに見て参ります。

## 1 なぜモーセとエリヤなのか

### 1) モーセ

29節から30節。「祈っておられると、その御顔の様子が変わり、その衣は白く光り輝いた。そして、見よ、二人の人がイエスと語り合っていた。それはモーセとエリヤで、栄光のうちに現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について、話していたのであった。」

ここを読むとき、私はいつも心に引っかかりを覚えることがありました。どうしてモーセとエリヤの二人なのか。他にも旧約聖書には有名な信仰者がいます。例えばアブラハムとかダビデであってもおかしくない。ところがなぜかこの二人だった。ということは、この二人でなければならない何かの理由があるのではないか。それは何か。

ここから推理小説のような展開になります。この二人が選ばれたからには、選ばれるための共通点があるはず。しかしすぐには思いつかない。そ

こでどうするか。単純かも知れませんが、ここは山の頂ですから、山に関係しているのではないかと当たりをつけてみたのです。

まずモーセですが、調べてみると彼は確かに山に登っている。出エジプト記19章20節。「主はシナイ山の頂に降りて来られた。主がモーセを山の頂に呼ばれたので、モーセは登って行った。」モーセはその山の上で十の戒めが記された二枚の石の板を手にして降りていきます。ところがふもとではイスラエルの民たちが金の子牛を造ってお祭り騒ぎをしていた。それを見たモーセは怒って、石の板を投げ捨てて砕いてしまう。そこからいろいろあったのですが、結局モーセはもう一度シナイ山に登ってあらためて二枚の石の板をもらうことになります。この板は後に契約の箱に収められ、神の臨在を表す大切な象徴となっていく。モーセと山は大切なかわりがありました。

### 2) エリヤ (第一列王記19章8節)

ではエリヤはどうか。彼はイスラエルが分裂した後の時代に活躍した人です。当時北王国ではバアル礼拝が盛んに行われていて、あるときエリヤは、そのバアルの預言者たちとたったひとりで闘わなければならない。幸いにして彼は勝利するのですが、あまりの緊張によって燃え尽きて倒れてしまいます。そのときのことが第一列王記19章8節にあります。「彼は起きて食べ、そして飲んだ。そしてこの食べ物に力を得て、四十日四十夜歩いて、神の山ホレブに着いた。」その山でエリヤは主と語り、力をいただいてもう一度預言者として活動を再開していく。エリヤにとって大きな転換点となった山、それがホレブであった。このホレブの山こそ、実はモーセが登ったシナイ山と同じ山。二人は同じ山に登って、そこで大きな経験をしていた。これが二人の共通点です。

でもモーセもエリヤもイエスもまったく異なる時代の人たちです。同じ山に登っただけで三人を結びつけるのは無理があるのではないかと疑問に思うかもしれません。けれども、ペテロはイエスがモーセとエリヤと語っているのを目撃し、そのことが福音書にはっきりと記されているのですから、こだわりたいと思います。では、そこから何が見えてくるのか。それはまた最後に触れることにして、先に進んで行きましょう。

## 2 「彼の言うことを聞け」

### 1) 父なる神の声

ペテロはこの不思議な光景を目にしてこう叫びます。33節。「この二人がイエスと別れようとしたとき、ペテロがイエスに言った。『先生。私たちがここにすることはすばらしいことです。幕屋を三つ造りましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために。』ペテロは自分の言っていることが分かっていなかった。」

「すばらしいことです」と訳していますが、「自分はなんてついているんだ(ラッキーだ)」くらいの意味です。いつものペテロの性格にますますアクセルがかかり、有頂天になってわけのわからないことを口走ってしまったということなのでしょう。そんなふうには舞い上がっていると雲がわき起こり、急に恐ろしくなってしまう。大の大人が雲に包まれたくらいで恐ろしくなるのは不自然です。恐ろしくなったのは雲のせいではなくて別のことがあるからです。こんな声がしてきました。「これはわたしの選んだ子。彼の言うことを聞け。」父なる神の声です。弟子たちが、姿は見えないけれど直ぐ間近に神がおられることがわかったのです。だから恐ろしくなった。

### 2) 最期について

ところでその父なる神が語ったことばですが、「彼の言うことを聞け」とありますが、いったい何を聞けと言っているのでしょうか。イエスの語ることは、何でも聞きなさい。もちろんそう捉えても間違いはない。しかし、もっと特別なことを指しているのではないか。最も近いところにあるのは31節です。「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について、話していたのであった。」遂げようとしておられる最期とは、言うまでもなく十字架のことです。しかしペテロがこの後、わけのわからなことを口走ったのですから、耳では聞いてはいたけれどまったく理解できなかったこととなります。

いやイエスが十字架のことを弟子たちに語ったのはこの山の上ばかりではありません。山に登る直前、9章22節で語り、山を降りてからも44節で語っている。計三回にわたって語っているのに、45節にあるとおりの「弟子たちには、このことばが理解でき」ないままでいたのです。

### 3) 真実を見ようとしないう弟子たち

36節には、弟子たちはここで見たこと聞いたことをだれにも話さなかったとあります。ペテロは「自分はずいている」と叫んだくらいですから、他の人たちに自慢してもよいはずですが、それが沈黙してしまうのですから、よほどの理由があるはずでしょう。

この後すぐに、弟子たちはだれが一番偉いかということと言い争いをしていたことが出てきます。なぜそんな話になるかと言えば、自分たちの先生であるイエスの人気がいまやうなぎ登りになり、人々はローマ帝国の支配下にあるこの国を解放して独立国家を実現してくれるのではないか、そういう期待をイエスに寄せてきている。そこで弟子たちは密かに考える。イエスにはイスラエルの王となってもらい、新しい政府の大臣に自分を選んでもらおう。自分が考える幸いが実現するためには、イエスに死んでもらったら困るのです。それで不吉なことは一切見なかった、聞かなかったことにした。それで何も言わなかったのです。

なんと馬鹿なことと思うかもしれませんが、だれだって同じことをしているのではないか。これは他人ごとではなくて自分でもそう感じる。なにか困ったことが起きても、多分大丈夫だろうと都合の良いことばかり見て、悪いことはなるべく見ないようにする。そうやって真実から目をそむけようとする。罪の性質です。ですから弟子たちのことは笑えません

そんな弟子たちにイエスはどうされるのでしょうか。あきれ果てて見捨てたか。いいえ。彼らの弱さをご存じの上で忍耐強く、待ち続けます。いつまで待ったか。十字架につるされ、弟子たちが逃げ去ったときでも、彼らが必ず理解してくれることを期待して待ち続けました。

## 3 光り輝くイエス

### 1) 時間を越えて御支配する神

なぜ、ここにモーセとエリヤが出て来るのか。まったく時代の異なる預言者たちが、イエスが山に登ったときに現れて互いに語り合うのはなぜか。そこから何が見えてくるのか。最後にまとめたいと思います。二つあります。

一つめ。世の人はここを読んで言うでしょう。「こんなことはあり得ない。ペテロは寝ぼけていて夢でも見たのだろう。」でも、私たちはそうは考えない。なぜか。創世記を読めばわかるように、聖書は、神がこの世界を造られ御支配されているところから始まります。このことが、聖書を理解するときの最初の土台となります。では時間のこ

とはどうなるか。時間も当然神の御手にあります。そうしますと、時代が違うからとか、既に死んでしまった人たちなので神は会話ができないということでしょうか。そんなことはない。神が時間を支配しているのであれば、神はあらゆる時間を越えることができます。たとえ過去であろうと未来であろうとだれとでも一緒に会話を自由にすることができる。永遠のいのちを信じるということは、このようなことである。それが一つ目にわかること。

## 2) 聖書全体が十字架のイエスを指し示す

二つ目。モーセもエリヤもホレブの山、シナイ山に登り、そこで神が語ることを聞きました。神はなにを語ったのか。旧約聖書にはぼんやりとしか書いていなかったかも知れません。ところが新約の時代になって初めて、モーセとエリヤが山の上で神から聞いたことが何であったかはっきりわかる。あのとき、モーセとエリヤはホレブの山、シナイ山でイエスが遂げようとしておられる十字架のみわざについて教えられていた。そのことがわかる。聖書は旧約であろうと新約であろうと、どちらも十字架で光り輝くイエスを指し示している。

聖書を通して神ご自身が私たちに語りかけてくださったこの一年を振り返り、その恵みに感謝しつつ、また新しい年を期待を持って迎えたいと願います。